成果報告会　発表資料

地域循環共生圏プラットフォーム事業

Hokushin Smart Terroir

北信スマートテロワール

日本の明日の農村

北信スマートテロワール

農業を核とした自立（自律）分散型農村による共（競）創ネットワーク

活動団体名：一般社団法人　スマート・テロワール協会

活動地域　：長野県・北信地域

（長野県小布施町を核として、長野市、高山村、須坂市、中野市、飯綱町、飯山市、信濃町）

北信スマートテロワール

環境省

土（持続するインフラ）づくり

住宅や地域交通を対象とした
エネルギーの地産地消の実証

②エネルギー代金の流出

③農地

③剪定枝

④剪定枝を利用した地域暖房

⑤地域内加工消費

④集落内農地を活用したソーラーシェアリング

⑤未利用資源の利用による経済的自立

⑤地域らしい新技術・サービスの活用

③地域交通

②CO2 排出量の 増大

③森林資源

③社会ストック（住宅）

④既存住宅の高気密化による健康住宅の推進

⑤多様な Way of Life

エコチェーン（廃棄物の資源化）

①北信スマートテロワール
農業を核とした
自立（自律）分散 型農村による共（競）創ネット ワーク

Envision
-100年後の農村計画図

インプロビゼーション
即興力

循環するものづくり

～食と農の再構築と加工拠点の連繋事業

⑤美食革命

新しいCivi lHeartの創造

④耕畜連携
畑作輪作

④酒米プロジェクト

③付加価値型稲作

③域内の牧場
（小布施牧場）

②遊休農地

人づくり

災害復興からの地域のレジリエンス強化と
農村景観をつくる「公」担い手となる中核人材の育成

⑤全員参加の共同体

③ファーマーズ

地域認証

④農村景観をつくる「公」の開発

②農業の後継者不足

③中核人材
コミュニティアントレプレナー

②災害に対するレジリエンス（回復力）

地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿

地域新産共生圏プラットフォーム事業
Hokushin Smart Terroir
北信スマートテロワール
日本の明日の農村

北信スマートテロワール
農業を核とした自立（自律）分散型農村による共（競）創ネットワーク

■ エディブルガーデン（食べられる庭）による土づくり

○現在使われている肥料や農薬、除草剤などの残留度を調べる
○自分達の土づくりにとって必要なことを知る機会をつくる。
○大きな鉢植えによるエディブルガーデン（食べられる庭）をつくり、畑を身近なものとしてする。

例：土の試験的利用から、健康で環境に優しく、おいしい野菜の実証をしつつ、新たな住宅景観を創造

肥料やたい肥を被比較し、自分達にあう土を探す。

食べれる野菜で様々な土を比較検証。

飾ることで景観に寄与

■ 信州の加工食材を使った食堂（社員食堂）

○加工食材をさらに掛け合わせることで健康で美味しい現代の信州食を開発。
○地域企業に向けて、健康的で毎日食べたくなる社員食堂を提供。
○多様な消費を生み出すことにより、消費のパターンを無限に生み出すレシピの検討。
○Amber LAB、伊那食品、サンクゼールなどとの連携信州の加工食材をさらに掛け合わせるの食堂のチャレンジ。

信州の加工食材

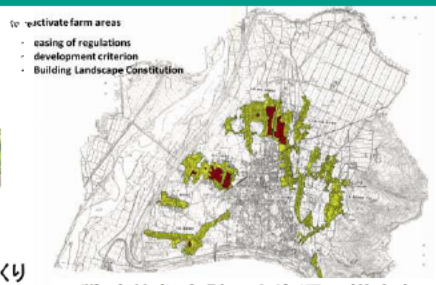
食健康で美味しい社食の開発
Natural Recipies Kitchen

信州の企業

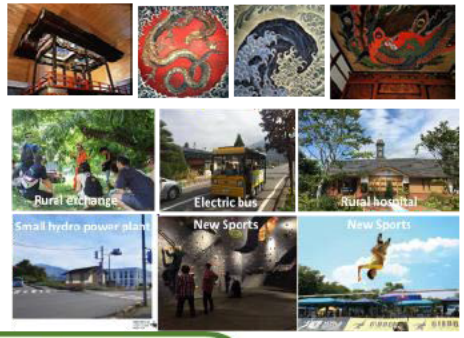
■ 遊休農地を活用した新たなプロダクト開発

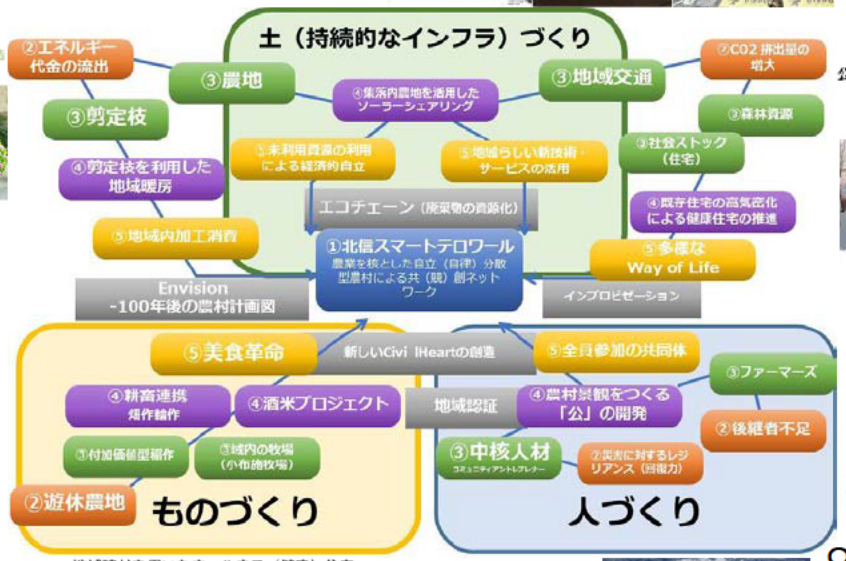
○小布施町にも1.8ｈａの遊休農地があり、今後増えていく可能性がある
○町の北部に広がる水田を買換し、加工向けの農産物を生産。ただし、小布施は農村景観をも守りたいので施設要望は避けたい。
○有力な加工農者、販路をデザインし、生産から販売まで一体的に考える。

例：農作づくりによる遊休農地の利用（例：使用gooseプロジェクト）



○戦略的都市計画と資源の掛合わせ
都市成長境界線　urban growth boundary





■ 地域建材を用いたウェルネス（健康）住宅

○周辺の森林の木材を活用（戦後60年を経て更新、造林計画を検討）
○1980年以前、あるいは前後の住宅を対象に、高気密・高断熱化
○県産材を用いることで、室内環境、景観にも寄与
○暖かい住宅の実現により、環境以上に生活環境の向上として浸透を図る

例：既存住宅ストックと長期利用の造林資源を活用し、健康で環境に優しい新たな住宅景観を創造

○環境にやさしくサスティナブルなインフラ

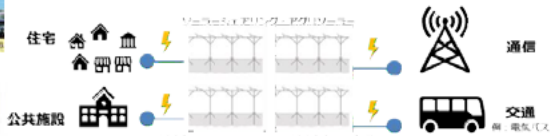
■ 集落内の農業とインフラの戦略的融合

○農業振興地域以外の農地でのソーラーシェアリング（アグリソーラー）
○施設園芸（シャインマスカット等）を中心として次世代の農業を模索。
○つくった電気を地域内で消費する（住戸、交通、通信）。

集落内の遊休農地等を活用

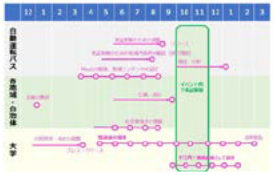
ソーラーシェアリング
（参考 千葉エコエネルギー）

アグリソーラー
参考 株式会社エヌエスイー

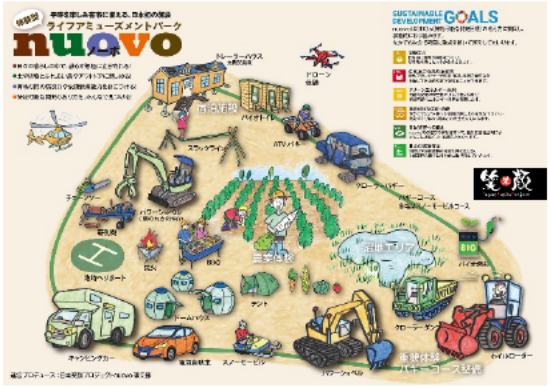


地域交通から新しい価値を

キーワード
移動こそ観光に
人が手を挙げてからでも止まれる速度
内の人も外の人にも優しい交通
交通=まで町の魅力を高める



○地域のレジリアンス　災害復興のための、しなやかな強さ


ライフアミューズメントパーク
nuovo
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
笑顔
ドローン
ハイドロ
スポーツ
バンパー
ボート
ボーリング
ボーコース
ハイボールコース
BIO
ハイキング
ドーム
ハウス
キャンピングカー
ブルドーザー
ハイドロローラー
ハイドロローラー
ハイドロローラ

地域のビジョンを実現するための成果指標

北信スマートテロワール～農業を核とした自立（自律）分散型農村による共（競）創ネットワーク

ただの自然ではない、ただの地元産ではない、ただの農地ではないスマートなテロワール（土地）。日本全体で、人口30～40万人規模の「農村地域経済圏」を定め、「スマー ト」（賢明＋洗練＋活発）を実現する「美しく・個性的で・豊穣な地域自給圏」を創造していく。

	短期目標	長期目標
環境	田んぼの畑作転換の面積の増大	北信地域の耕作放棄地面積の減少
	エネルギー自給率、電化率、シュリンクの拡大	自治体RE100の実現とCO2排出実質0へ
経済	未利用資源（再エネ・廃棄物）の利活用	加工事業者と結びついた森林・農地の利用
	住宅・交通関連部門のCO2削減	小布施のエネルギー代金（18億円）の流出削減
社会	健康省エネ住宅やスローモビリティの導入	人口減少に対応した適正規模
	コミュニティアントレプレナー数の増大	組織の自立展開

コアとなる事業の概要3つ（事業のタネ）

1	事業の名称	土（持続するインフラ）づくり～住宅や地域交通を対象としたエネルギーの地産地消の実証事業	
	事業の概要	a. 地域木材を使ったウェルネス住宅の体験 b. 小布施版ソーラーシェアリング（ぶどう、トマト）での実証地域の電気をつくる農業モデル C. エネルギーの地産地消：地域の電気を地域交通で使う仕組みの検討（移動こそ観光に）	想定される課題・ボトルネック ・住宅の環境性能評価に対する知見 ・農地利用に関する開発手続き ・開発費用と運営費のバランス ・開発規模の把握

2	事業の名称	循環するものづくり～食と農の再構築と加工拠点の連繋事業	
	事業の概要	a. 耕作放棄地をつかった酒米づくり b. 有休農地を、牧場に、たい肥を活用する土づくり～和ウニ農場での実験 c. さまざまな「土」の検証によるエディブルガーデン（食べられる庭）づくり d. 地域加工品を組み合わせた3次加工品開発	想定される課題・ボトルネック ・開発費用と運営費のバランス ・開発規模の把握

3	事業の名称	人づくり～災害復興からの地域のレジリエンス強化と農村景観をつくる「公」担い手となる中核人材育成事業	
	事業の概要	a. 平時に楽しみ有事に備える農業×防災テーマパーク「nouvo-ノーボ」 b. 森林の消費者育成～木遣いのができる人材育成	想定される課題・ボトルネック ・運営費 ・組織化と体制のゴール設定

今年度事業の成果と課題、今後の意気込み

今年度の成果
（本事業に取り組んで良かったこと）

- 関係者のヒアリング、意見交換をしながら、個別の事業を詰めていくことを中心に行ったが、事務局はプロジェクトマネージャー（PM）として全体を俯瞰しながら計画をすることで、資源同士の関係性、繋がっていない点、共通する課題として共有し連携することで循環して解決に繋がることを確認できた。マンダラは1つのビジョンとして示すことになり、それぞれがやっていた活動が繋がるイメージ（共生圏）を持つことになった。
- 地域循環共生圏構築していくために、域内で活動するプロジェクトが自立しつつ有機的に繋がることが大事だと実感できた。地域資源の数量的把握を進め、共通の目標を設定していきたい。

地域の活動の上での課題

- 成果指標について：勉強会によって関係者や地域の参加者が現状を数値的に捉え、課題を構造化し「なりたい姿（ビジョン、目標）」を具体化することの必要性を実感できた。しかし、台風19号の影響もあり、根本的な数値のリサーチの遅れがでてしまった。再構築する時間、さらなる情報の整理、関係各所との調整が必要となっている。
- 地域循環共生圏を構築するするプラットフォームとして、**2019年度は９つのプロジェクトと18の事業者、アドバイザーや行政など32名のステークホルダーを巻き込んだ。**今後、複数の資源や団体の取組みを支援し、情報が集まる場、交流する機会をつくり、さらなる**イノベーション（新結合）を**起こしていけるような仕組みを構築したい。

今後の意気込み

実践する地域の農家・企業・団体の活動を支援しながら成果を把握しつつ、**共生圏の中でプロジェクト同士のリンク**を図りたい。活動が自律しかつ**「競争」しつつ「共創」するようなプロジェクト・マネジメントの仕組み（システム・体制）**を具体的に構築することを来年度目指す。同時に様々な支援メニューを活用し、事業化して自立する方法を模索する。

- 北信スマートテロワール　プロジェクトマネージャー（PM）会議（5月上旬）
- 北信スマートテロワール　プロジェクトリーダー（PL）会議・総会（5月中旬）
- 各プロジェクトの実施　個別相談・サポート（5月～11月）
- 北信スマートテロワール　事業中間報告・プラットフォーム会議（12月）
- 次年度に向けた事業プレゼンテーション・事業計画発表会（予算会議）（2月）